

おかげさまでJotoキソパッキング工法累計採用棟数が 600万棟達成

城東テクノ



城東テクノ
末久 泰朗 社長

廃プラに着目した独自素材

当社はもともと樹脂の押出成型メーカーでした。1970年の大阪万博以降、日本は大量生産大量消費の真っ只中にあり、新しいプラスチック素材が毎日当たり前のように使い捨てにされるのを見た当社の創業者であり現名誉会長の末久史朗は、この状況が今後大きな社会問題になると予測。樹脂の再生技術の研究を始めました。

ちょうどその頃、火力発電所から出る焼却灰の処分に困っているという話を聞きつけた創業者は、樹脂の充填材として焼却灰を使うことを着想。廃プラスチックと、焼却灰や炭酸カルシウムを混ぜ合わせるとどんな物性の素材ができるのか試行錯誤を重ね、最終的に、炭酸カルシウムを高配合した新しい複合材「Joto コンパウンド（通称 JC）」を1971年に開発したのでした。

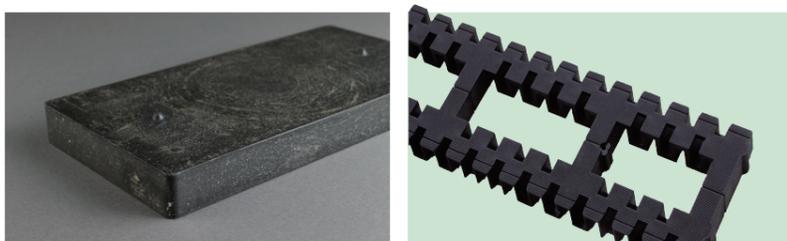
樹脂と充填材の配合割合は通常、樹脂の方が多いのですが、JCではその割合を逆転。樹脂なのに石のように硬く、複雑な成型を可能にしました。

ねこ土台工法と JC を融合

一方で同じ頃、日本古来の建築技術である「ねこ土台工法」を一般住宅に広めたいという思いを持つ大工さん

これからも現場第一で「丈夫で長持ち」に 貢献するユニークな建材をつくり続ける

今から47年前の1976年に誕生した城東テクノ（大阪市）のキソパッキングを使った「Joto キソパッキング工法」累計採用棟数が600万棟を突破した。この途方もない数に行き着くまでの道のりとこれからを末久泰朗社長が語った。



左：初めて開発したキソパッキング
右：現場の声を吸い上げて改良を重ねたキソパッキングロング。
近年は中大規模木造建築向けの85mm幅タイプ、CLT工法向けの高強度タイプなどもある

と出会いました。JCなら通常の樹脂ではつくれない肉厚なねこ土台の成型が可能であるとの発想から、1976年に「キソパッキング」が誕生しました。

これを基礎と土台の間に敷き込むことで全周換気を促して床下環境を良好にするとともに、基礎と土台を絶縁することで木部の腐れとシロアリ被害から住宅を守るという、新しい素材からなる新しい建材が生まれたのです。身の回りの樹脂製品を見回すと、キソパッキングのように20mmもの厚みがある樹脂の塊がとても珍しいものであることを感じていただけたと思います。

阪神大震災が契機に

ただ、キソパッキングが最初から世の中に受け入れられたわけではありません。いくつかの転機がありました。

最初のハードルは、建築基準法に規定のない材料・工法をいかに広めるかでした。そこで、当時の住宅金融公庫が創設した評価承認制度の第1号を1994年に取得。公庫の仕様規定

に適合する工法として、普及に向けて立ち上がった矢先の1995年1月、阪神淡路大震災が発生します。

震災直後、倒壊した住宅の被害状況を調査すると、その原因の多くが土台木部の腐食や蟻害、基礎の割れであることが判明しました。風窓によるスポット換気では隅の通し柱のあたりに湿気がたまり、腐れやシロアリに狙われやすくなることを目の当たりにした私たちは、日本古来の神社仏閣のように、床下・木部の乾燥状態を保つことが住宅を丈夫で長持ちさせるカギだと確信。それには床下を全周換気して湿み域をなくすJoto キソパッキング工法が有効だと再確認したのです。

住宅会社に直接アプローチ

私たちは、Joto キソパッキング工法のしくみを正しく理解してもらい、工法に対する誤解や疑問を解消するために、住宅会社に直接アプローチする営業スタイルをとりました。1996年以降、営業拠点を全国に増やして住宅会社に工

法のメリットを丁寧に説明するとともに、その際に寄せられた施工上・法律上・技術上の問題点や疑問点をひとつひとつ解決していきました。

早朝から建て方の現場にも立ち合い、大工さん達と親しくなるなかで工法の理解を促すとともに、商品開発・改良のネタになる話をたくさん持ち帰ることができたのも大きな収穫でした。

私たちメーカーが住宅会社に直接訪問するのは当時としてはかなり珍しい試みでしたが、独自の営業スタイルとして確立しました。

その結果、キソパッキングは、土台木部の長持ちに貢献するだけでなく、風窓が不要になり、施工の省力化と基礎強度の向上につながるといった付加的なメリットも受け入れられ、おかげ様で急速に広まっていきました。

休まず進化を続けた

「工法とは思想」だと考えています。ですから善し悪しではなく、自分たちは信じる道を進み、それに共感してくださった方がより長持ちする家を建てられるように一生懸命お手伝いする。私たちのやるべきことはこれに尽きるのだと思います。

ですからJoto キソパッキング工法が一般化されるにつれ、類似商品が次々と出てきましたが、私たちは他社製品を否定することは一切しませんでした。

一方で、検証・研究・改良を繰り返し、商品の形状や機能性はどんどん進歩させてきました。例えば、ショートからロングへと長さを変えたり、玄関や浴室向けに通気しない気密タイプをつくったり、今では信じられないかもしれませんが、当時使用されないことも珍しくなかった水切りを提案したのも、防鼠付水切りを開発したのも、さらには施工性を高めるために水切りの立ち上がり部に両面テープを

付けたのも私たちが始まりです。こうした進歩を後押ししてきたのが、現場の声を吸い上げる独自の営業スタイルであり、その声を確実に商品開発部に届ける仕組みとして「提案起案制度」を整えています。

2002年には「Joto しろあり保証制度」をスタート。キソパッキングという“ハード”と、保証という“ソフト”が絡み合いながら進化したサービスとして、2015年にグッドデザイン賞ベスト100を受賞しました。

環境を考えたロングライフ工法

もう1つ、当社のキソパッキングについて知っていただきたいのは、環境配慮型の建材であるということ。

原料に再生樹脂を使い、炭酸カルシウムを高配合することで樹脂の使用量を抑え、さらに長期使用を可能にしました。構造体に使われるキソパッキングの場合、30年、50年もの間この世にとどまっているわけですから、環境負荷はそれだけ小さく考えています。

長持ち住まいを実現するために

「ユニークな建材で長持ち住まいをささえます。」——これが当社のコーポレートスローガンです。

ユニーク、つまり独自性のある商品を生み出すには、柔軟な発想力だけではなく、その商品に求められる性能や品質を担保するだけの責任と技術が不可欠です。そのため、商品開発にあたり、公的機関などで予備試験や検査を繰り返す必要があったため、ユニークな建材を世に送り出すまでに時間がかかるのが課題でした。

そこで今年、送風散水試験や耐火性試験などを自前でを行う施設として「城東テクノ開発試験センター」を大



今年本格始動する城東テクノ開発試験センター。敷地面積700坪。送風散水試験、耐火性試験のほか、建て方研修などができる

阪工場のはす向かいに建設。10月から本格始動します。

これにより、社内で予備試験が可能となり開発のスピードを上げ、性能・品質が担保された商品をより早くお届けすることができるようになります。さらに、約50年前に誕生したキソパッキングの性能の持続性と、変わりゆく法制度への適合性についても、定期的な検査を行って品質を担保し続けます。

未来の現場の声を聞く

「人が生活する住まいは丈夫で長持ちでなければならない」という信念のもと、長年提案してきたJoto キソパッキング工法の累計採用棟数がおかげさまで600万棟*を達成しました（2023年6月末現在）。私たちの工法に共感し、認めていただいた証だと認識しており、皆さまのご愛顧に心より感謝申し上げます。

それだけキソパッキングが身近な存在になったことをありがたく感じると同時に、数十年に渡って人々の生活を支え続ける商品をつくる責任の重さを改めて感じています。

私たちは、あらゆる変化の最先端は現場にあると信じ、中期計画においても「未来の現場の声を聞こう」をスローガンに現場の声に常に耳を傾け、これからもキソパッキングのようなユニークな建材、長持ち住まいに貢献するものづくりに挑戦して参ります。